
a s n o w y c r y s t a l 七色の見る夢

海響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a s n o w y c r y s t a l 七色の見る夢

【Nコード】

N4807V

【作者名】

海響

【あらすじ】

ある日、雪華は不思議な門を見つける。それは、異世界へと導く始まりだった。

そこで出会った一匹の竜と一緒に、さまざま出来事に向かっていく恋愛ファンタジーです。

恋愛が書きたくて始めたお話ですが、温かく見守ってください。行き当たりばったりのお話ですが、温かく見守ってください。

第一話

風が枝を揺らし、薄く色づいた花弁を空へと舞い上げていく。

その様子を見上げながら、彼女は愁い顔を隠しもせず、木の下に座り込んでいた。

校庭では、部活に励む生徒達の声が響いている、その声も校舎裏のこの場所までは届いてこない。

まるでこの場所だけ切り離された空間のようだ。

青空に舞う雪のような花弁、それが地面に降り積もり、まるで絨毯のようだ。

美しいと感じる景色に心を和ませながら、雪華^{セツカ}は、瞳を閉じた……

唯一、安らげる場所……この大切な時間を壊されたくない……だが、それも叶えられることはないだろうことも解っていた。

自分は解っていないながら何故、この場所に来てしまったのか……避けて通ることの出来ない未来、同じ事が繰り返される日々から開放される時がくるのだろうか。

それだけが、そのことだけが……わからない……

小石を踏みしめる音がする。

それは、安穩とした時間^{とき}を終幕へと誘^{よび}つ、足音だったのかもしれない

「ねえ、ユキ！」

「きやつ!？」

後ろから友人の麻子が飛びついてきた、覗き込む瞳は隠しきれない好奇心み満ちている。

この友人は何度言っても自分ことを「ユキ」と呼ぶ、「セツカ」では他の人と一緒に嫌なのだそうだ。

「やっぱり行くの？」

「だつて行かなければ失礼だし・・・でも、物好きよね」

「はあく相変わらず真面目だね。それに自分のこと解つてないし・・・。あんな人気の無い場所、ほいほい行くんじゃないっ！行かなきゃソレが答えになるじゃないっ」

興奮し、捲くし立ててくる麻子に気後れしながら、言い訳するように口を動かす。

「自分の事くらい解つてるわよ。私はあなたと違って、普通の女の子です」

「なにそれっ私が普通じゃないというわけっ！」

「女性にモテる女は、普通じゃないわ。自分のこと解つてないのは、そっちじゃないの？」

「もおーっ可愛くない!!」

「お褒め頂き、ありがとう」

「っ!!」

ふふんつと答える私に、友人が視界いっぱい迫ってきた。

この辺りで、からかうのを止めないと本気で怒り出すかもしれない。

「まあ、冗談はここまでにして」

「冗談っ！？また、私のことからかったの！！」

なぜかもつと怒りだした・・・どこで失敗したのかわからない。

「ああーもう、いいわよ。でも、本当に気をつけてよね。心配してるんだから」

気を取り直した麻子が、手を振りながら、過保護な言葉を呟く。そんな友人の言葉に苦笑返しながら、自分には「大丈夫」な理由がわかっていても答えられない。

麻子は、苦笑を返してくる友人に「やっぱりわかっていない」と思いつつ、そんな顔をしてもらって「綺麗だな」と思う。

腰まで届く絹糸のような黒髪は、動きに合わせてサラサラと流れ、夏の制服から覗く白磁の肌は、さらにその黒髪を引き立てている。

黒曜石を思わせる少し切れ上がった大きな瞳、小さな唇は、肌とは対照的に紅を指したような赤色だ。

「美少女」という言葉があるが、まさにそれ以外の言葉では言い表せない顔立ちをしている。

だが、本人にまったく自覚がない、「美少女」らしからぬ言動をして周りを驚かせている。

なぜ、こうなってしまったのか。

普通なら周りが放っておかないと思うが、雪華に高校で出会ったときからこうだった。

何かあるのだろうが、雪華が話さない限り聞き出すとは思わない。はあっとため息をつき、雪華に向けて微笑む。

雪華は突然黙り込み、微笑んできた友人に怪訝な顔をしながらも、時間になるといつものように別れの言葉を告げ歩き出す。

麻子は、その後ろ姿を見送りながら、自分も汗を流すため部活に向かうのだった。

この時、二人は知らなかった・・・このときが話をする最後の時間ときだことを・・・

第二話

目的の場所に着いた雪華は、顔を隠すように立てた膝に頭を埋め、座り込む。

指定されたこの場所は、雪華にとって唯一安らげる場所だ、暇さえあればいつもここにいる。

他の人達には気に止まらない場所のようだが、自然が美しく、大切な場所だ。

いつも居るので、待ち合わせの相手は、拒否されるのを回避するためにここを指定したのだろう。

この場所を見つけた瞬間、なぜか「ここだ」と思った。入学して、暇を持て余し、彷徨っているときに見つけた。それから約一年間、放課後は忙しくても毎日通っている、休みの日に来られないのだけが残念だ。

別れたときの麻子は、複雑な顔をしていた。

きつと、隠している内容は分からなくても、隠し事があることは察しているのだろう。

聞かれない事を良いことにここまで来たが、いい加減伝えなければいけないのかもしれない。

・・・でも、ずるい自分は踏み切ることが出来ないでいる。

過去を思うと、どうしても切り出せない、嫌われるのが怖い。

やはり、どこかで麻子を信用していないのだろうか・・・いや、

信用していないのだろう。

信用していれば、とつくに麻子は知っていたはずだ。

私は、あのときから少しも進歩していない・・・もしかしたら、するつもりが無いのかもしれない。

幸せだった記憶は、五歳をむかえるまでだった。

それまでは、両親に愛され、幸せに満ちた日々だった。

あの日を境にすべては一変した・・・

小さく、何故そんな事になったのか理解できないときは、失ってしまった両親を取り戻そうと泣いて縋ったが、時間が経ち、やがて成長とともに心も閉ざした。

周りの人達の蔑んだ視線、それを避けるように遠巻きに見る両親。
両親の目は、自分も何かされるのかと怯え、まるで化け物を見ているようだった。

そんなことをする力なんてない・・・持っていたって他者を傷つけるようななんて思わない。

自分たちが生んだ子供を、そんな目で見る両親に一番傷ついた。守ってくれると、愛してくれていると信じていた両親に突然手を振り払われ、雪華は人を信じるのを止めた。

一番身近で、信頼し、頼りにできる筈の親たちは、世間の目を気に

して生活は保障してくれたが、雪華の心はあっさり捨てた。

親でさえもあっさり捨てるのだから、赤の他人になんて心を開けない。

・・・本当は、そんな人達ばかりではない事も知っている。

でも、臆病な雪華は同じ場所に止まったまま動けないでいる。

つらつらと過去むかしのことを考えている内に、時間がきたのか小石を踏みしめる音が聞こえてきた。

憂鬱ゆううつになった気分を振り払うために、大きく息を吐きながら気持ち切り換える。

空虚くうそな日々、代わり映えない灰色の世界・・・いつか、抜け出せる瞬間とぎは、訪れるのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4807v/>

a s n o w y c r y s t a l 七色の見る夢

2011年10月9日03時52分発行